

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

山麓の豊かな農村 東門寺

受賞者 ^{とうもんじ} 東門寺集落
(^{くまもとけんくまもとし} 熊本県熊本市)

■ 地域の沿革と概要

東門寺集落がある熊本市は、九州の中央部近くに位置し、人口約73万人、面積389.5km²である。熊本市は、相次ぐ近隣町村との合併により、昭和52年には人口が50万人を突破した。平成3年には、北部町、^{ほくぶまち} 飽田町、^{あきたまち} 天明町、そして東門寺集落のある河内町が合併し、さらに、平成20年に^{とみあいまち} 富合町、平成22年には^{じょうなんまち} 城南町、^{うえきまち} 植木町と合併し、平成24年4月から政令指定都市に移行した。

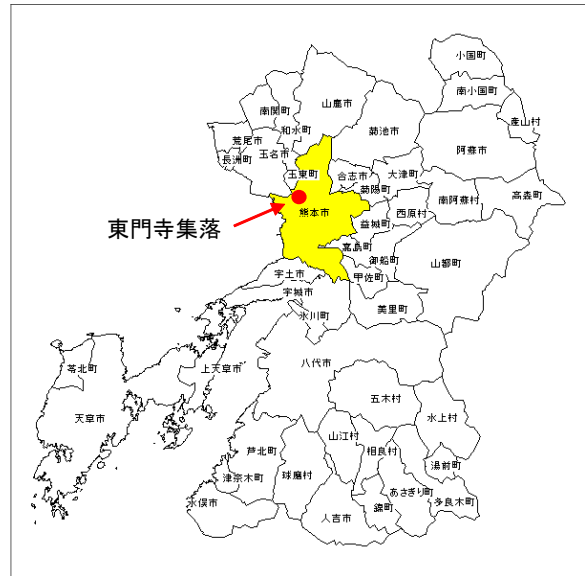
■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

東門寺集落は、熊本市近郊で、熊本市役所から約15km(直線距離で約8km)に位置する。また、^{きんぼうざん} 金峰山系カルデラの外輪山の山麓(標高約300m)に位置し、平坦地は少なく耕地面積の98%が樹園地、2%が水田となっており、みかんと梨を主体とした果樹の生産地である。

集落の東側は、冬に地表面と上空の温度が逆転する「逆転層」ができ、比較的温暖な気候を利用したみかん栽培が行われ、西側は年間の寒暖差を利用した梨栽培が中心に行われている。この気象条件下で栽培された梨やみかんは糖度が高く、東京や大阪の消費地では高い評価を得ている。また、四季を通じて美しい景観に恵まれており、その景観に梅、桜、梨、みかんの花々が彩を添えている。特に4

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	1集落
地区の性格	地縁的集団
農家率 (内訳)	73.7% 総世帯数 38戸 総農家数 28戸
専業別農家数 (内訳)	28戸 専業農家 16戸 1種兼農家 4戸 2種兼農家 8戸
農用地の状況 (内訳)	耕地計 64.7ha 田 1.3ha 畑 0ha 樹園地 63.5ha 耕地率 18.9% 農家一戸当たり耕地面積 2.3ha

月には梨の花で梨棚が純白なじゅうたんとなり、10月にはみかんのオレンジ色が山肌を彩る。

明治の終わり頃から、梨、たけのこの生産、昭和30年前後には東門寺の基幹農業産物となるみかんの生産が始まった。集落が山麓にあるため、幾多の干ばつや台風災害を受けたが、そのたびに復興を重ねて現在の東門寺集落を築き上げてきた。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機・背景

東門寺集落では、農業の経営規模が小さく、経営基盤を確立させないと集落も存続できないという危機感があった。そのため、集落全体を活性化するため、平成8年から2年間を掛けて集落全員参加による集落ビジョンの作成を行った。

ビジョンでは、東門寺らしさとして「①自然を大切にした環境作り、②ゆとりある農業経営、③仲の良い集落、④歴史と伝統を守る、⑤旬の食べ物がある」の5点を確認し、「山麓の豊かな農村、東門寺」というスローガンを掲げている。

このスローガンの下、集落内環境美化活動、果樹の多品目栽培と農産物加工品の製造販売による通年収入が得られる経営形態の確立、集落内遺産の保存と伝統文化の継承、都市と農村との交流などに集落全員が役割分担を行いながら取り組み、住みよいむらづくりを行ってきた。

特に農業体験活動の際には、東門寺の農産物や伝統行事を紹介しながら東門寺ファンの獲得に力を入れるとともに、近年は、ALT（外国人語学指導助手）との交流活動により、子ども達の国際感覚の育成を行ってきた。

しかし、小・中学生の減少等の新たな課題が顕著になってきたため、平成23年度に女性や子どもたちの意見を聞きながら集落全員によるワークショップを行い、課題解決に向けた新しい活動計画を作成して新たなむらづくり活動を開始している。

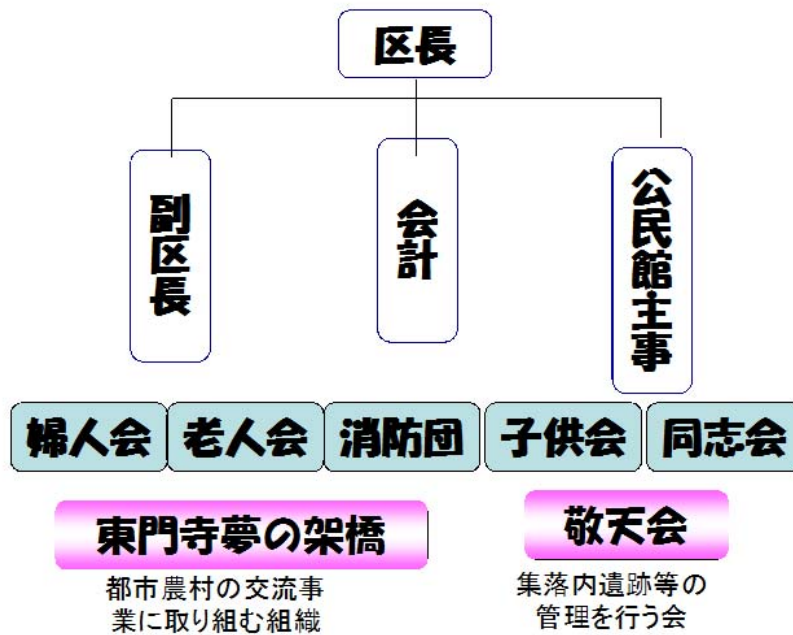


写真1 子どもたちによるワークショップ

(2) むらづくりの推進体制

東門寺集落では、区長を中心に自治会、農家組合、東門寺夢の架橋、とうもんじゆめ かけはし敬天会などの12の組織けいてんかい(自治会を構成する老人会、婦人会等の組織を含む。)が連携した活動が行われている。

第2図 推進体制図



ア 自治会

集落体制を維持するため、区長、副区長、会計及び公民館主事を置き、下部組織として老人会、婦人会、子供会等の組織を配置している。区長、副区長及び農家組合長の3つの役員は、投票による選挙で選ばれているとともに、職務に当たる自覚と責任を持っていることから、各世帯の集落活動に参加する意識が高い。

イ 農家組合・果樹同志会

集落内の農家で組織された農家組合と青年農業者の集まりである果樹同志会は、農業経営の安定を目的としてみかんや梨の管理講習会、新たな栽培技術の導入等の検討を行っている。近年では、増加しているインシによる鳥獣被害の防止対策などにも取り組んでいる。

ウ 東門寺夢の架橋

平成15年に集落の有志18戸で発足した組織で、「都市」と「農村」の交流の架け橋になることを活動目標とし、東門寺の良さである恵まれた自然環境や地域の農業を多くの都市住民へ情報発信して地域の活性化へとつなげるため、年4回の農業体験活動等に取り組んでいる。

エ 敬天会

集落では、平成3年頃から山中の巨石群「^{おがみがいし} 拝ヶ石」を観光資源とするため、山の麓から巨石群へ通じる旧道の復元活動に取り組んでいる。平成10年には、最も険しい区間に市の補助を受けて233段の階段を設置したことを契機とし、文化遺産を正しく後世に継承するために「敬天会」を結成した。現在では、遺産保存のために「敬天祭」や集落の子ども達

への勉強会を実施している。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) しっかりとした農業経営のもと、農業後継者が多く残っている

山間部の集落に人が住み続けるためには、経済基盤の確立が重要であるとの認識の下、農業所得の向上に向けて農家が互いに協力しながら努力が続けられてきた。その努力の結果は、園内作業道の整備や果樹多角経営への転換、高品質みかんの生産実績などに表れており、中でも園内作業道の整備によるスピードスプレーの導入率の高さには目を見張るものがある。これらの努力の結果、集落には8戸の農家に20代又は30代の後継者がいる。

(2) 小さな集落（38戸）の中に、全員参加のむらづくり体制

38戸と規模の小さい集落に12の組織があり、3戸に1戸は各組織の会長を担っている。そのため、各組織の会長職が頻繁に回ってくることを集落全員が当たり前のこととして受け止め、責任ある行動を取ろうという意識が浸透している。何か行事があれば、必ず女性も含めて全戸参加という体制が確立されており、この全戸出動の体制が本集落発展に大きく寄与し、各組織の後継者育成も円滑に行われている。

(3) 山間部であるが都市に近い立地条件を活かした農業体験と交流活動

当集落は、バスが通っていないほどの不便な集落である。しかし、多くの消費者が住む熊本市の市街地に車で30分程というメリットをいかし、集落内の豊かな自然環境、みかん、梨、たけのこ等の豊富な農産物及び「挿ヶ石」の歴史的遺産を活用した交流活動を展開し、外部から多くの訪問者を呼び込んでいる。また、交流に当たっては、集落全戸でチラシの制作や祭りの企画・運営を行い、集落のまとまりの良さを生かした行政に頼らない手作りの活動を行っている。

これらの活動により、都市住民との連帯感や農産物への信頼感が生まれ、口コミで集落の評判が広まっている。そして、この評判が集落への新しい風の取り込みや、若者同士の交流・情報発信にもつながっている。

(4) 農作業の忙しい中でも「楽しいことをしよう」という発想と合意形成の速さ

労働時間については、梨主体の単一経営から果樹複合経営に転換したことによって平準化した¹が、農家の人々は「たけのこ掘りをしながら梨の管理など、年中がまださなん（忙しく働く必要があるという意味）」と声をそろえて言う。しかし、集落みんなが集まると「なんかおもしろいことばしよかねー（なにかおもしろいことをしましようか）」という話になり、すぐに様々な催しを企画して実行するなど、集落の住民は、忙しい中にも心に遊び（豊かさ）と実行力を持っている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 農業所得の向上

梨主体の生産では農業所得が安定しなかったことから、昭和30年頃からみかん、梨、たけのこを主体とした果樹複合経営への転換に力を注いできた。現在は、農家ごとの労働力や経営面積に合わせ、温州みかんと梨を主体としてたけのこ、梅、かき、不知火（デコポン）等の生産が行われ、年間を通した農業所得の安定と向上が図られている。

また、農家組合の主催によるほ場を巡回しながらの情報交換、果樹同志会が中心となる栽培講習会の実施等により集落農家全戸で栽培技術レベルの向上を図り、互いに切磋琢磨を行いながら農業経営を行っている。

(2) 担い手の育成

農業経営の安定化に加え、家族経営協定締結による労働環境の改善にも取り組んでいる。その結果、ゆとりのある農業生活が営まれ、集落内の専業農家16戸のうち、50歳代以下の経営主がいる農家が15戸、20代又は30代の後継者がいる農家も8戸と、他の地域に比べて若年層の担い手が多い。

(3) みかん園の作業道と灌漑施設の整備

みかんの運搬作業の効率化や防除作業の省力化を図るため、農家全員の共同作業による園内作業道の整備とスピードスプレーの導入が行われた。

また、平成14年4月に中山間地域等直接支払制度の交付金を活用して灌漑施設（揚水配管1,370m、貯水槽300トン）を建設し、干ばつ時における用水確保の労力の大幅な軽減を可能とした。

(4) 鳥獣害被害軽減対策

10年ほど前からイノシシによる鳥獣被害が増加したことから、農家組合が主体となり、園内への侵入防止ネット、電気柵及び金網柵を設置して被害軽減に努めている。

また、農家組合員が狩猟免許を取得し、被害防止と捕獲対策を同時に行うなど地域ぐるみの被害軽減対策を行っている。

(5) 農産加工の取組

女性が中心となって、干したたけのこ、梨を使用したゼリー菓子やパイ、南高梅の梅干しなどの製造販売を行い、農産物の付加価値を高めながら所得の向上につなげている。

また、捕獲したイノシシ肉を利活用するため、6次産業化を視野に入れた燻製加工などの試作も行っている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 集落環境の整備

集落総出による美化作業（区役）として、特に子ども達の安全確保のため、通学路の草刈りなどの維持管理を年4回行っている。

また、平成6年には、熊本県の「農村景観コンクール」において、集落住民一体となった「住みやすいむらづくり」の取組により人口流出を防いでいるとして、最優秀賞の「農村景観大賞」を受賞した。

（2）都市と農村の交流

「東門寺夢の架橋」が中心となって10年近く続いている農業体験交流会には、福岡や鹿児島から参加するリピーターが多い。また、集落の住民にとって普段の生活の中では気付かない集落の良さを再認識する機会となっている。

8月には、平成8年の集落ビジョン作成のワークショップで実現化した「東門寺集落全員集合」と銘打った花火大会を開催し、近隣集落からの参加者も含めて500名以上が参加している。



写真2 農業体験交流会における田植え体験

（3）集落内遺産の保存

集落内の菅原神社の神事など、年間14回の祭事を集落で執り行っており、代々の伝統文化の継承に努めている。

また、「拝ヶ石」の保存を行っている「敬天会」は、遊歩道や案内板の整備、定期的な清掃等を行って来訪者の利便性向上を図るとともに、毎年4月に地元住民と関係団体が拝ヶ石山頂への登り口で祝詞を上げる「敬天祭」を開催するなど、観光資源としての利活用を行っている。



写真3 パワースポット「拝ヶ石」

（4）高齢者と女性のむらづくりへの参加

農作業や集落環境の維持活動などにおける高齢者や女性の担う役割は大きく、集落内のコミュニケーションを図っていく上では欠かせない存在となっている。高齢者や女性の参加を支えているのは、50年以上も続いている集落のお嫁さんと姑さんで構成された「嫁姑の会」という交流会である。本会では、伝統料理や風習の伝承などが行われており、嫁いできた女性が地域に溶け込む良い機会となっている。